

第三章 遺構

4カ年4回にわたる発掘調査で、古墳時代から近代に至る数多くの遺構を検出した。以下では、これらを、藤原宮に関連する遺構、藤原京に関連する遺構、その他の古代の遺構、古墳時代の遺構、中世以降の遺構にわけて報告する。

1 藤原宮の南限施設

第118次調査東区および第124次調査区において、藤原宮南面大垣および外濠と内濠を確認した。これらは、藤原宮南面中門（朱雀門）以東で、はじめて確認された藤原宮の南限施設である。

南面大垣SA2900 (PLAN 4・5, PL.3・4, Fig.5) 第118次調査東区と第124次調査区で、それぞれ柱穴4基・3間分ずつを確認した。柱間約2.7m(9間)の掘立柱塀である。柱掘形は一辺約1.5m前後の方形で、深さ0.7~1mが残っていた。柱はすべて北または南に抜き取られていた。

南面外濠SD501 (PLAN 4・5, PL.3~5, Fig.5) 南面大垣の南17mにある素掘の溝であり、断面形は台形である。東岸の第118次調査東区では、幅4.5m、深さ1.2mの規模、西岸の第124次調査区では、幅4.5~4.7m、深さ0.7mの規模であった。埋土は、砂や粗砂を主体とする流水堆積層であって、埋め立てられた痕跡に乏しかった。

少量の土器と瓦が出土した。第124次調査区の外濠SD501最上層には暗灰色粘質土が堆積し、その上面から、ほぼ完形の丸瓦と平瓦が敷き並べた状態で出土した。

南面内濠SD502 (PLAN 4・5, PL.3~5, Fig.5) 南面大垣の北約12mにある素掘溝である。第118次調査東区では、幅2.7m、深さ1.3mの規模で、溝の断面形はV字形をしていた。また、第118次調査西区では、幅2.0m、深さ1.1mの規模で、断面形状はともに台形であった。

溝内の下層には、青灰色砂を主体とする厚さ0.2~0.4mの流水堆積層があり、少量の土器と瓦が出土した。上層には黄灰褐色砂質土が堆積していた。これは、内濠を埋め戻した土層であろう。

掘立柱建物SB9750 (PLAN 4, PL.5) 第124次調査区の南面大垣SA2900と内濠SD502との間で検出した。梁行2間で、梁行・桁行とも10尺等間の東西棟建物。西妻柱穴は確認したが、東は池で失われ、建物の全長は不明である。柱掘形は一辺約1.2m、残存した深さは0.7mである。

北側柱の柱掘形は、内濠SD502の南岸に近接しており、掘形の北壁は垂直ではなく傾斜して掘られている。おそらく、内濠の南肩を壊さないように配慮して柱掘形が掘削されたためであろう。とするならば、SB9750は内濠開削後に建設された可能性が大きく、両者は併存していたと推測できる。

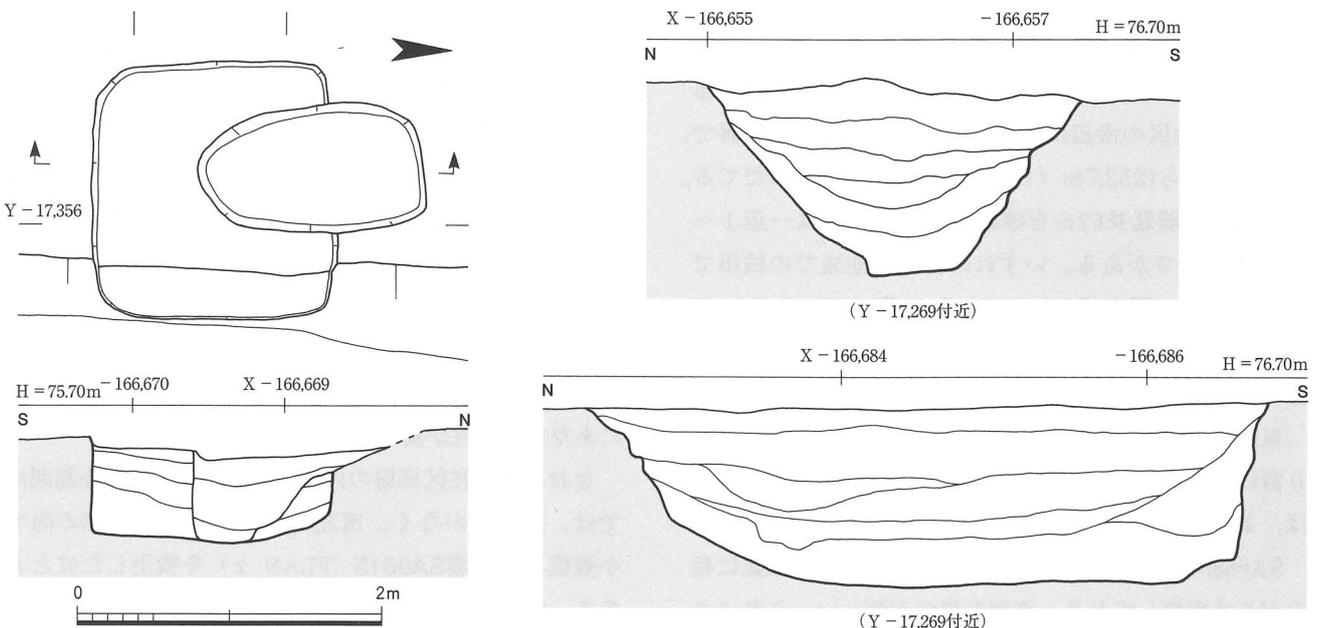


Fig. 5 大垣柱穴(左)と内濠(右上)・外濠(右下) 1:50

このSB9750の南側柱筋と南に約1.5m（5尺）を隔てた位置に、素掘の東西溝SD9745（PLAN 4）がある。幅約1.2m、深さ約0.3mの規模で、溝底に流水痕跡とみられる砂が堆積する。

SD9745は、南面大垣から計ると、その北約3m（10尺）の位置にもあたり、大垣の北雨落溝の可能性も想定される。しかしながら、大垣の南側に同様の溝が確認できないこと、さらに、過去の調査で大垣雨落溝の検出例がないことから、SB9750の雨落溝とみるのが妥当であろう。

2 藤原宮東南官衙地区関連遺構

宮の南限施設以北は、東南官衙地区と仮称している地区に相当する。この地区は、東を東面大垣、南を南面大垣、西を南面東門から北に延びる宮内道路（推定）そして北を東面南門から西に延びる宮内道路（推定）で囲まれた一郭である。現状でいえば、高所寺池北部から高殿集落南端部におよぶ範囲にあたる。

東南官衙地区については、過去にまとまった面積の発掘調査がほとんどおこなわれておらず、内部の状況がまったくわかっていなかった。第118次調査区は、北区を中心としてその多くがこの地区に及んでいて、そこで、いくつか重要な知見をうることができた。

検出した遺構には、掘立柱建物3棟と掘立柱塀6条のほか、溝や土坑がある。これらと重複して、宮内先行条坊関係の遺構も検出したが、これらについては、後にまとめてとりあげる。

A 区画塀

第118次調査北区で、掘立柱東西塀1条とこれに接続する掘立柱南北塀4条を検出した。

東西塀SA9580（PLAN 2・3、PL.6、Fig.6）は、第118次調査北区の南辺に平行して検出された掘立柱塀で、南面大垣からは52.7m（150大尺、180小尺）をへだてる。東西23間、総延長62mを確認した。柱掘形は一辺1～1.5mの大きさがある。いずれの柱穴も池底での検出であったため、深さは0.3～0.5mしか残っていなかった。柱間は、約2.7m（9尺）等間である。一部、第113次調査時に土壌改良をおこなったため柱穴が欠けている。

東西塀SA9580の西端は、南北塀SA9605との接続部より西には柱穴がないので確定する。西端の柱穴の東隣には、より新しい柱穴が重複していた。

SA9580の東端では、南北塀SA9575と交わる位置に柱穴が2基重複しており、東側の柱穴が新しい。これより東は、池の上げ樋改修工事ともなう攪乱によって遺構

面が失われていたため、柱穴が続くのかどうかは確認できなかった。また、後述する、東二坊坊間路西側溝との重複部分も同様に破壊されていて、確認できなかった。

なお、これより東方で1992年におこなった調査（第66-14次調査）では、東西塀SA9580の東延長に近い位置で柱穴1基を確認した（『藤原概報23』）が、柱筋が若干ずれていて一連の柱列にはならない可能性が高い。

東西塀SA9580に接続する南北塀は4条ある。東から順に述べる。

南北塀SA9575（PLAN 3、PL.6、Fig.6）は、第118次調査北区の東端にある掘立柱塀である。東西塀SA9580の東端の柱穴につながる。柱穴2基を検出し、調査区外の北に延びる。柱掘形は一辺1.1～1.2m。北側の柱掘形は深さは0.7mあり、南側の柱掘形は深さ0.5mであるが、柱抜取穴は深さ1mある。2基とも柱を東へ抜き取っている。

南北塀SA9585（PLAN 3、Fig.6）は、南北塀SA9575の西23.8mにある掘立柱塀である。東西塀SA9580の柱間でいうと、西に9間のところである。柱穴2基を検出した。SA9580との接続部から南を第113次調査の際に土壌改良したために、接続部以南の状況は不明である。柱掘形は一辺1.2mの方形で、深さは0.7～1mある。柱は2基とも、ほぼ真上に抜き取られていた。

南北塀SA9595（PLAN 2）は、南北塀SA9585の西21.7mにある掘立柱塀である。東西塀SA9580の柱間では、SA9585から8間分、西に位置する。柱穴2基を確認したにとどまる。柱掘形は一辺1.2m、柱間は約2.7mである。

南北塀SA9605（PLAN 2）は、東西塀SA9580の西端に接続する掘立柱塀である。SA9580の北で柱穴を2基検出した。南北塀SA9595とは15.9mを隔てる。東西塀SA9580の柱間では6間分である。

南北塀SA9605と東西塀SA9580が接続する位置より南は、調査できなかったため、ここで両者がL字形につながるのか、南北塀SA9605が南に延びてT字形に接続するかは確定できない。

以上の南北塀4条のうち、東西両端のSA9575とSA9605は、約62mを隔てる。これは、175大尺（210小尺）にあたる可能性が高い。

なお、掘立柱区画塀の内側（北側）では、調査範囲内では、建物跡がなく、南北塀SA9595とSA9605の間で、小規模な東西塀SA9615（PLAN 2）を検出したにとどまる。柱穴は、一辺約0.5m、深さ0.5mの方形の柱掘形をもち、柱間は約1.5mである。西端の柱穴は、南北塀

SA9605の柱抜取穴に壊されている。

B 掘立柱建物 (PLAN 2、PL.7、Fig.6)

区画塀の西方においては、比較的規模の大きい掘立柱建物2棟が逆L字形に配置されていた。掘立柱東西棟建物SB9600と、掘立柱南北棟建物SB9601である。

掘立柱建物SB9600は、東妻柱筋と北側柱筋の柱穴を検出した。東妻に柱穴4基が並ぶので、南庇付き東西棟建物と推定する。柱間は、梁行・桁行とも約2.7m(9尺)である。身舎の柱掘形は一辺1.2~2m、深さ1.1~1.3mある。東南隅にある南庇の柱掘形は、一辺1.3m、深さ0.7mでやや浅い。掘形の底に建築部材の断片を礎盤として据えていた。なお、柱はすべて抜き取られていた。北側柱筋の東から2間目の柱抜取穴は、底近くで柱痕跡状となり、それによると柱径は30cmはある。この柱抜取穴からは、ほぼ完形の土師器皿が出土した。

掘立柱建物SB9601は、SB9600の東側にある南北棟建物である。梁行2間、桁行5間以上、柱間約2.7m(9尺)の規模だが、妻柱の位置は不明である。柱筋は、SB9600と揃っている。柱掘形は一辺約1.2m、深さ0.8~

1.0mある。柱はすべて抜き取られており、東側柱は西へ、西側柱は東へ抜かれていた。西側柱の柱穴抜取穴で判断すると、柱の径は20~25cmと推定できる。

建物SB9600の東妻柱筋とSB9601の西側柱筋とは、約9m(30尺)を隔てる。また、SB9601と南北塀SA9605との間隔は約6m(20尺)である。

東西棟建物SB9600の北には、掘立柱南北塀SA9636がある。柱掘形の一辺1.2m、深さ0.5mあり、柱間約1.8m(6尺)の塀である。南端の柱穴には、直径20cmの柱材が残っていた。SA9636は、建物SB9600の東妻柱から2本目の北側柱と柱筋が揃うように思う。

建物SB9600の南方、約40mを隔てて、掘立柱東西棟建物SB9648がある。第118次調査西区の西壁に沿って、柱穴3基が南北に並んでいるので、建物の東妻柱列と判断した。柱掘形は一辺1.2~1.6m、深さ1mの規模である。柱間は2.4m(8尺)等間。柱筋が、北にある東西棟建物SB9600と揃うようにもみえる。だが、柱掘形の全体を検出して柱位置を確定させるに至らなかったため、可能性を指摘するにとどめる。

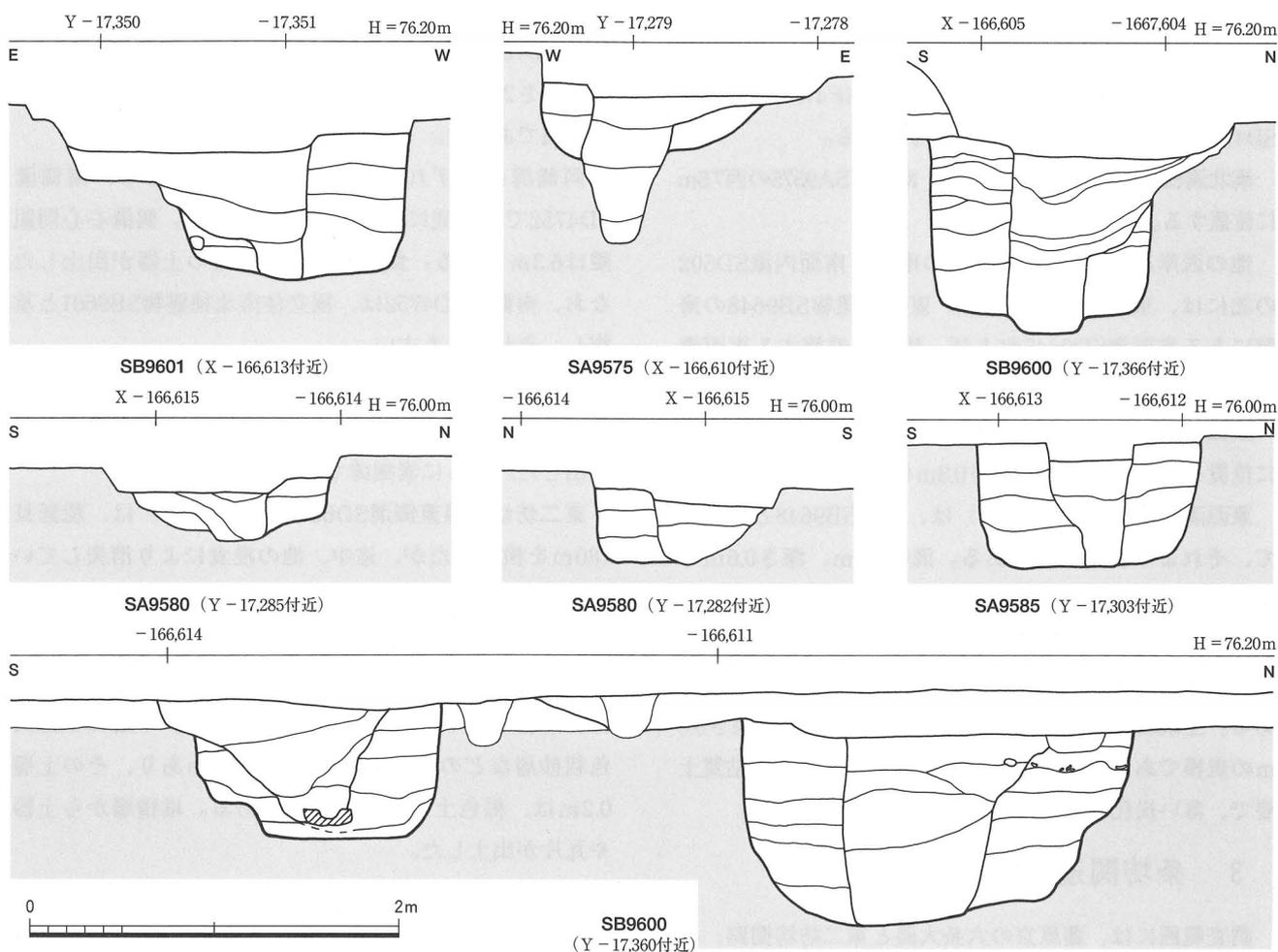


Fig. 6 建物・塀の柱穴断面図 1:40

C その他の遺構

第118次調査東区の北部には、東西溝SD9560と、L字形に接続する南北溝SD9561がある。

東西溝SD9560 (PLAN 5, PL.8) は、溝の幅1.6m。内濠SD502に近接し、両者の心の間距離は5.4mである。

南北溝SD9561 (PLAN 5) は、幅1.3~1.5m、深さ0.4~0.6mあり、総延長約26mを検出した。水は、SD9560を西へ、SD9561を北に流れる。

東西溝SD9560および南北溝SD9561南端部には、灰白色の砂が堆積し、激しい流水状況をうかがわせるとともに、そのなかには大量の瓦が埋没していた。また、SD9561からは、ほぼ欠損のない軒丸瓦6274型式B種と6275型式A種が各1点出土した。

なお、東西溝SD9560と内濠との距離(心の間5.4m)は、第118次調査西区にある掘立柱東西棟建物SB9648の南側柱筋と内濠溝心との距離に近い。

第118次調査北区には、東西溝SD9633と南北溝SD9577がある。

東西溝SD9633 (PLAN 2) は、溝幅1~2m、深さ約0.2m。土器のほか、中国製内行花紋鏡片が出土した。掘立柱建物SB9600およびSB9601と重複し、それらより古い溝である。次節でのべる六条条間路SF4750の南側溝SD4752とは、溝心で約3.5~4mを隔てる。

南北溝SD9577 (PLAN 3) は、南北堀SA9575の西7.5mに位置する。溝幅約1.2m。

池の西岸、第118次調査西区の南端、南面内濠SD502の北には、東西溝が2条ある。東西棟建物SB9648の南側にある東西溝SD9645および、建物と重複する東西溝SD9646である。

東西溝SD9645 (PLAN 2) は、内濠SD502の北2.2mに位置し、溝幅約1m、深さ0.3mの規模である。

東西溝SD9646 (PLAN 2) は、建物SB9648と重複して、それより新しい溝である。溝幅1.4m、深さ0.6mの規模である。2条とも土器などの遺物は出土しなかった。

このほか、比較的規模の大きな土坑として、掘立柱東西棟建物SB9600の北に隣接する、溝状の土坑SK9637がある。土坑SK9637は、長さ2m以上、幅1.6m、深さ0.6mの規模である。埋土は、暗褐色ないし暗灰色の粘質土層で、薄い炭化物層や腐食物層をはさんでいた。

3 条坊関連遺構

調査範囲には、藤原京の六条大路と東二坊坊間路、そして、藤原宮内先行条坊の東二坊坊間路と六条条間路の

存在が予想された。調査の結果、これらを第113・118・124次の各調査区において確認した。

六条大路SF2910 (PLAN 6・7) 第113次調査区で北側溝SD2915(長さ約7m)と南側溝SD2909を、また第124次調査区でも北側溝SD2915(長さ約5m)を検出した。

六条大路北側溝SD2915 (PLAN 6・7, PL.9) は、溝幅2.3m、深さ0.8mあり、下層は砂と粘土が互層をなす流水堆積層である。第124次調査区では、溝幅2.4m、深さ0.6mの規模である。灰褐色粘質土と灰褐色砂質土が堆積し、最終的に黄灰色粘質土で埋め立てられていた。

六条大路南側溝SD2909 (PLAN 9) は、第113次調査区で確認したが、第131次調査西区では確認できなかった。溝幅2m、深さ0.35mの規模で、北側溝よりも浅い。

第113次調査区での、六条大路南北両側溝の心の間距離は16.2m、路面幅はおおよそ14mである。

六条条間路SF4750 (PLAN 2) 第118次調査北区において、南北両側溝を検出した。ともに素掘溝である。

六条条間路北側溝SD4751 (PLAN 2) は、北区拡張区で長さ2mを確認した。溝幅0.4m、深さ0.3mである。

六条条間路南側溝SD4752 (PLAN 2) は、北区の西部で長さ30mにわたって検出できたほか、東部でも南岸のみを長さ20分検出した。溝幅1.0~1.2m、深さ0.2~0.3mの規模であった。

両側溝はいずれも、灰褐色土を埋土とし、南側溝SD4752では溝底に粗砂の堆積を認めた。側溝心の間距離は6.3mである。側溝からは、少量の土器が出土した。なお、南側溝SD4752は、掘立柱南北棟建物SB9601と重複し、それよりも古い。

東二坊坊間路SF6030 (PLAN 9, PL.9) 第113次調査東区と第118次調査東区・北区において、東西両側溝を検出した。ともに素掘溝である。

東二坊坊間路東側溝SD6031 (PLAN 9) は、総延長180mを検出したが、途中、池の浸食により消失していたり、調査区外に位置したため、検出できなかったところもある。六条大路以南では、溝幅0.6~0.8m、深さ0.15~0.2mの規模である。六条大路と南面大垣との間では、溝幅1.6m、深さ0.5mの規模である。下層には褐灰色粗砂層などの流水堆積層が厚さ0.3mあり、その上層0.2mは、褐色土の埋め立て層である。堆積層から土器や瓦片が出土した。

東二坊坊間路東側溝SD6031と外濠SD501との交差部分では、外濠の南岸において、東側溝SD6031から外濠にむかって粗砂が流れ込んだ状態を認めた。これに対し

4 藤原京左京七条二坊の遺構

第113次調査区と第131次調査東南区が、藤原京左京七条二坊東北坪にふくまれるが、第131次調査東南区は、高所寺池の水口に近いこともあって削平が著しく、藤原宮の時期を含め7世紀代の遺構は、残っていなかった。第113次調査区で検出した遺構について述べる。井戸、溝と掘立柱塀がある。

井戸SE9330 (PLAN 9, PL10, Fig.8) は、東二坊坊間路西側溝SD6032の西約10m、調査区南辺から約10mのところにある、横板組の五角形井戸である。掘形は直径約2.5mの円形平面で、検出面からの深さは2m。

井戸枠は差し渡し径が1.5mあり、下の2段が原位置を保っていた。井戸の中には、上段の枠板6枚が捨て込まれていた。うち2枚は腐朽が著しかったため、取り上げができなかった。井戸の底には川原石が敷かれ、埋土を掘り上げるときれいな水が湧き出した。

最下段の井戸枠5枚(東北面をA板、以下時計回りにB～Eとよぶ)は組手接で、A板が上下に割れており、他の4枚は完形に近い。A板とC板(東南面)は両端を凹字形、東面B板(東面)とE板(西北面)両端を凸字形、D板(西南面)はC板側を凸字形、E板を凹字形に造り出す。枠板は全長が103～106cm、高さは62～64cm、厚さは4～5cmで、五角形の一辺の内法は93～96cmである。檜材で、大径の老齢木から木取りされている。A板とC板が樹芯に近い。

枠板にはチョウナ、ノコギリ、ノミによる加工痕を確認できる。D板とE板の井戸の外側にあたる面にはチョウナ痕がよく残る。井戸の内側の面は外側の面にくらべ加工痕が明瞭ではないが、同様にチョウナ仕上げとみられる。木口はノコギリで切断した痕跡があり、組手をつくり出す際にノミも併用しているとみられる。木口は組手の接合面を五角形の角度にあわせて斜めに加工し、その他の面は、ほぼ直直に仕上げる。ただし、B板のA板側凸部のみはヨキで斜めに削った粗仕上げである。

A板のB板側の下寄りには長方形の釘穴がある。釘穴は五角形の組手に近い角度で貫通している。仕口を固定するための釘穴と思われるが、対応するB板には釘穴がなく、実際には使用されなかったようである。

上段の枠板は欠損・風蝕が大きい。木口の段欠き・柄のつくり出しが残っており、最下段と同様の三枚組接とみられる。寸法も最下段の枠板とほぼ等しい。上下の枠板は突付けて重ねている。

井戸枠内の埋土から、土器や瓦、木製品が出土した。出土土器は、土師器杯A・C、皿、高杯、鉢、甕、鍋、須恵器杯A・B、杯B蓋、平瓶、長頸壺、甕などがある。これらの土器の時期は、7世紀後半から藤原宮期(飛鳥IV～V)である。井戸底から出土した近江産の長胴甕は、頸部から体部表面に籠目の痕跡が残っており、釣瓶として使われたことがわかる。

東西溝SD9323 (PLAN 9) は、第113次調査区の南辺に沿った位置にある素掘溝である。南岸が調査区外にあり、調査区内で幅1m分を検出した。深さは0.4～0.5m。溝の位置は、六条大路路面心から南約60m、六条大路南側溝SD4752から南約52mなので、七条二坊東北坪を南北に二分する区画溝の可能性もある。埋土上層には灰褐色砂質土、下層には青灰色粘土が堆積していた。7世紀後半から藤原宮期にかけての比較的多量の土器や瓦が出土した。

掘立柱東西塀SA9331 (PLAN 9) は、井戸SE9330の西にある掘立柱塀である。6間分を検出した。柱掘形は一辺0.6～0.8mの隅丸方形ないし隅丸長方形で、深さは0.3～0.5mである。柱間は1.8～2.1m(6～7尺)と不揃いである。柱は抜き取られたものが多い。

5 宮直前期までの7世紀代の遺構

各調査区では、出土した土器の型式や、遺構の重複関係などから、藤原宮以前の7世紀代と判断できる遺構をいくつか検出した。これらをおおむね、新しい順に述べる。

A 7世紀後半から藤原宮直前期までの遺構

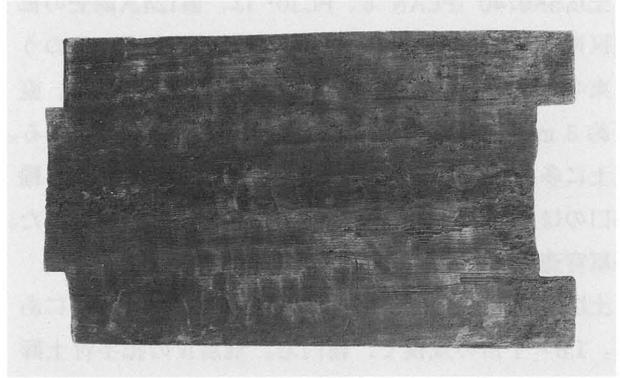
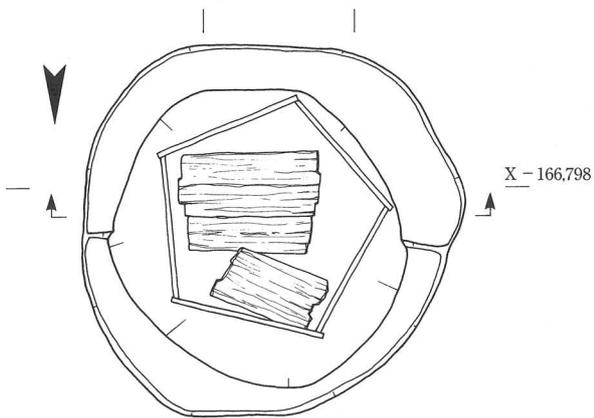
おもに飛鳥IVの土器を出土した遺構をまとめる。

第118次調査東区北端から約5m南に東西溝SD9567がある。幅1m、埋土は礫混灰茶色砂質土。土坑SK9568と重複し、それより新しい。飛鳥IVの土器が出土した。

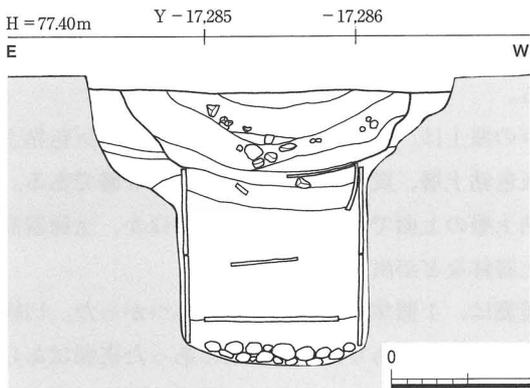
第118次調査北区東部に、東西溝SD9576 (PLAN 3) がある。溝は東で北に振れる。南北塀SA9575と重複し、それより古い。溝幅1.5m、深さ0.5mで、埋土は炭粒を含む黒褐色土。飛鳥IVの土師器甕などが出土した。

第118次調査西区には、土坑SK9650(径1.5×1.2m)、SK9651(径1.5×1.5m以上)、SK9660(径2.4×2.2m)、SK9663(径1.5m)などがある(PLAN 2)。いずれも深さ0.2～0.3mで、飛鳥IVの土器を出土した。

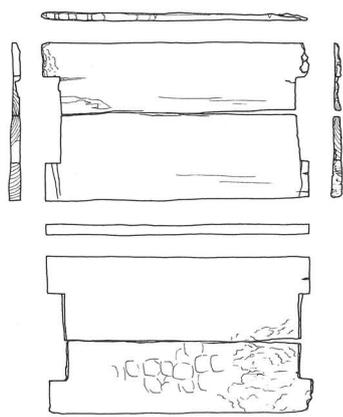
第124次調査区には、直径3×2.2mの隅丸台形の土坑SK9731 (PLAN 6) がある。深さ0.4mで、完形に近い土師器小型甕が出土した。時期は飛鳥IVである。



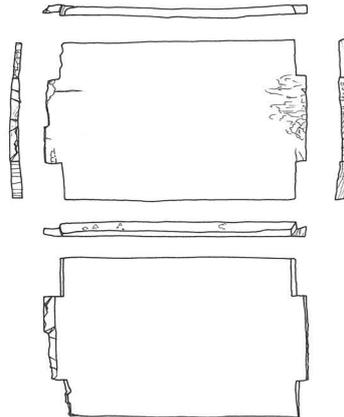
D板 (裏面)



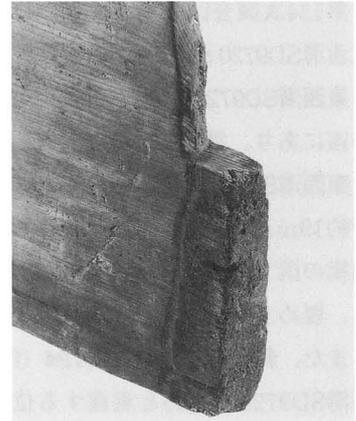
B板 (端部)



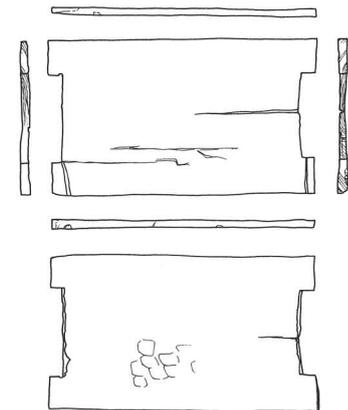
A板



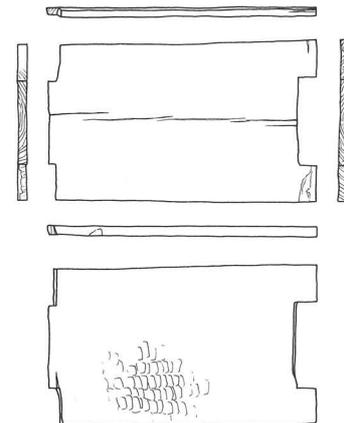
B板



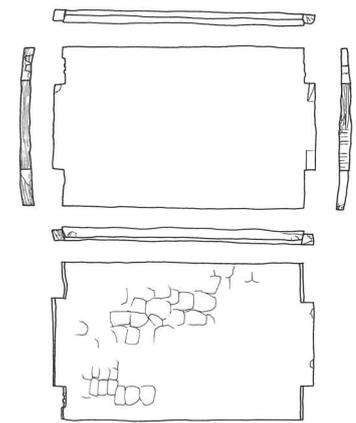
A板の釘穴



C板



D板



E板

Fig. 8 井戸SE9330と最下段井戸枠材 1:30 (遺構のみ 1:50)

土坑SK9740 (PLAN 6、PL.10) は、第124次調査の拡張区西南隅にある。全体の約1/4を検出したが、そのうち東半分は、攪乱によって削平されていた。土坑は、直径約3mの円形をなすようで、深さは約0.9mである。埋土に多少の炭を含む。土器、建築部材のはつり屑、韃羽口のほか、木簡削屑のほか、飛鳥Ⅳの土器が出土した。藤原官造営にともなう廃棄土坑であろう。

土坑SK9743 (PLAN 6) は外濠の南岸から南3mにある。1.6×1mの規模で、楕円形。飛鳥Ⅳの把手付土器甕が出土。

第124次調査南部にある南北溝SD9730は、幅0.5m、深さ0.25mの規模で、ほぼ同規模の東西溝SD9729と接続してL字形をなす。SD9730は土坑SK9731と重複してそれより古い。7世紀後半の遺構であろう。

B 7世紀中頃の遺構

7世紀中頃と確定できた遺構は、素掘溝に限られる。

第118次調査東区では、藤原宮南面外濠SD501の南に、斜行溝SD9540がある。溝幅0.6~0.8mの規模である。南面外濠SD501および東二坊坊間路東側溝SD6031と重複しており、それらより古い。飛鳥Ⅰの土器が少量出土した。

第124次調査区の南部では、ほぼ正方位をとる2条の東西溝SD9720とSD9725を検出した。

東西溝SD9720 (PLAN 6) は、六条大路北側溝SD2915の南にあり、溝幅2.2~3.0m、深さ0.25mの規模である。

東西溝SD9725 (PLAN 6) は、SD9720から心間距離で約19m北にある。溝幅2.7m、深さ0.3mの、よく似た規模の溝である。溝埋土上部には、黄灰色砂質土が堆積し、埋め立てられた状況がみてとれた。

また、斜行溝SD9722・9724 (PLAN 6、PL.10) は、東西溝SD9720・9725と重複する位置にあり、それらより古い溝である。両者はほぼ平行し、東にある斜行溝SD9722は、溝幅1.2m、深さ0.6m、西にある斜行溝SD9724は、溝幅1.5m、深さ0.6mのきぼである。ともに、溝の断面形はV字形をしている。須恵器杯H、土師器杯C・Hなど、飛鳥Ⅰの土器が出土した。

6 古墳時代の遺構

第113次調査区と第118次調査東区と北区、そして131次調査区において、古墳時代の遺構を検出した。

掘立柱建物SB9333 (PLAN 9、PL.11) は、北で西に18度ふれる方位。桁行4間(総長8.8m)、梁行3間(総長4.6m)。柱掘形は一辺0.6~0.8m、深さ0.3~0.5mである。

東二坊坊間路路面と重複して斜行溝SD9340・9341

(PLAN 9) がある。SD9340は溝幅2m、SD9341は溝幅0.5mで両者ほぼ平行する。

第113次調査区北部の六条北側溝SD2915と重複する位置に2条の溝、SD9350とSD9351 (PLAN 7) がある。ともに5世紀後半の土器を出土した。

第113次調査区の西端近くに斜行溝SD9334がある。溝幅は最大で1.8mあり、深さ0.3mある。須恵器壺が出土した。緩く湾曲するので古墳周溝の可能性もある。

井戸SE9570 (PLAN 5、PL.11) は、直径約2mある円形平面の素掘の井戸である。掘形の上部は漏斗状に開き、下部はほぼ円筒形をしている。井戸底は湧水層の灰色砂礫層に達する。検出面から井戸底までの深さは1.1mある。

井戸の埋土は、下層から、腐植物混じり暗灰色粘土層、暗茶灰色粘土層、炭混じり黒褐色土、の3層である。暗灰色粘土層の上面で、須恵器大型甕のほか、土師器高杯、漢式土器鉢などが出土した。

大型甕は、1個体が潰れた状態でみつかった。口縁部が井戸の西北部にあり、その南東にあった底部はあらかじめ打ち欠かれていた。さらに、胴部の破片に重なるように、径25cmほどの石があった。これらによって、井戸を埋める際、底を抜いた須恵器大型甕を置き、石をぶつけて破砕したと判断して過たないであろう。土師器高杯などは、転落して埋没した状態であった。井戸を埋め立てる時の儀礼の痕跡として、注目すべき一例である。

第118次調査北区には、南北溝SD9581と斜行溝SD9582 (PLAN 3) がある。ともに砂質土を埋土とし、5世紀代の須恵器と土師器が出土した。

第131次調査区では、古墳周溝3条を確認した。いずれも円墳の周溝であろう。

東北区にある溝SD9850 (PLAN 8、PL.12) は、最大幅2.25mの弧状の溝で、内径21m、外径26m、残存長18m。溝の底から、赤色顔料の付着した土師器甕や須恵器高杯のほか埴輪が出土した。

西区中央にある溝SD9870 (PLAN 8、PL.12) は、最大幅2.5mの弧状の溝で、内径は20m、外径は25m、残存長22m。溝は深さ0.4mが残り、灰褐色粘質土と茶灰色粘質土が互層に堆積する。須恵器高杯・甕、土師器甕・ミニチュア壺が散乱して出土した。

西区の北部にある溝SD9871 (PLAN 8、PL.12) は、内径17.5m、外径20m、溝の最大幅は1.3m。溝は深さ0.3mが残り、灰褐色粘質土と茶褐色粘質土が互層に堆積していた。溝の最下部から、土師器高杯が出土した。

7 中世の遺構

鎌倉時代（13世紀後半を中心とする）の井戸と土坑および溝が、池の南半にもうけた調査区（第113次調査区、第131次調査西・東北・東南区）に分布している。

井戸 川原石積みの井戸と曲物側板を重ねた井戸、曲物の上に板材を縦板組した井戸がある。

井戸SE9328（PLAN 8、PL.13、Fig.9）は、第113次調査区南西部にある石組井戸。掘形は円形で、直径は2.8×2.5m、検出面から井戸底までの深さは1.9mある。井戸底から約1.2mの高さに、川原石積みの円形石組が残る。石組は、下段の5～6段に径30～40cmの大型の石を積み、それより上には径20～30cmの小ぶりの石を積み上げる。検出面から0.9mほどの積み石は抜き取られていた。井戸埋土および抜取穴埋土から、瓦器、土師器や木製品などが出土した。時期は、13世紀後半である。

井戸SE9345（PLAN 7、PL.13、Fig.9）は、第113次調査区の北部にある石組井戸である。直径1.8m、深さ1.5mの平面円形の掘形の底に、底を抜いた曲物（直径42cm、高さ40cm）を据え、その上に川原石を使った円形の石組を積み上げる。現存する石組は8段ないし9段で、高さは1.05mである。埋土から、瓦器、土師器、木製品のほか石鍋1点が出土した。13世紀後半。

井戸SE9346（PLAN 7）は、井戸SE9345の北西約5mにある石組井戸である。掘形は一辺約2.5mの方形をなし、川原石を円形に積み上げている。13世紀後半。

第131次調査では、7基の井戸を検出した。西北にある井戸から記述する。

井戸SE9880（PLAN 8、PL.13、Fig.9）は、高さ45～50cmの曲物の側板を3段重ねた上に、厚さ0.8cmほどの板材8枚を縦板組で組み、不整な八角形の井戸枠とした井戸である。縦板井戸枠の内径は0.5m。下から2段目と3段目の曲物側板の間には、小石を挟み込み、さらに曲物底板を差し込んで曲物側板を固定していた。掘形は、平面が円形で直径1.1m、深さは1.6m以上である。

井戸SE9881・9882（PLAN 8、PL.13）は、井戸SE9880の東、約4mにある。SE9882は、井戸枠の上部が大きく抜き取られており、下半分の曲物側板4段だけが残っていた。曲物は最下段のものが直径38cm、最上段は直径54cmあって、上のものほど径が大きい。また、抜取穴の底からは、曲物の側板1個が遊離した状態で出土した。井戸の掘形は直径1.1mの円形で、深さは1.6mである。裏込めには、曲物の底板が入っており、井戸を作る過程

で曲物を分解して積み上げた様子がうかがえる。この井戸SE9882は、西側にある井戸SE9881と重複し、それよりあとに構築されたことがわかる。井戸SE9881は、抜取穴を確認しただけで井戸枠の構造は不明である。

井戸SE9883（PLAN 8、PL.13、Fig.9）は、調査区の西南隅、井戸SE9880の南約15mにある井戸。SE9880と構造は似ているが、掘形の形などで違いもある。井戸掘形は上面で一辺1.8～2.6mの台形平面をし、この形で掘り下げた後、西に偏った位置を径0.6mの円形に、さらに0.55m掘り下げる。現状での掘形の深さは1.6mである。掘形底から曲物側板を5段積み重ね、その高さまで掘形を埋めた後、縦板を組み上げる。縦板は下端の部分が痕跡的に残っていた。

井戸SE9884（PLAN 8、PL.13、Fig.9）は、井戸SE9882の南約14m、井戸SE9883の東約7mにある井戸。直径2.4mの円形掘形の中央に、川原石を積み上げて井戸枠としている。石積みは内径約0.6mである。

井戸SE9885・9886（PLAN 8）は、井戸SE9884の北東約10mにある。SE9885は、直径0.85mの掘形を掘ったのち、東に寄った位置を径0.4mでさらに掘り下げ、そこに曲物の側板を据えている。曲物は4段が現存する。井戸SE9886は、SE9885の東側に重複するそれより古い井戸であるが、抜取穴だけしか残っていない。

井戸SE9860（PLAN 8）は、第131次調査東北区にある井戸。曲物側板を重ねて井戸枠とした井戸である。3.85×2.8mの規模をもつ長方形平面の井戸掘形中央に、曲物側板を積み重ねて井戸枠とする。井戸枠の上部0.9mは抜き取られ、下の3段だけが残っていたが、3段目も半壊していた。現存の深さは1.5mである。井戸枠の底には、拳大の川原石が詰められており、粗砂が堆積していた。井戸枠抜取穴から、瓦器や土師器が出土した。

井戸SE9861（PLAN 8）は、直径約1mの円形素掘りの野井戸である。深さは1.1m。近世の遺構であろう。

土坑 第113次調査南区の西南隅に方形の土坑が2基ある。土坑SK9326とSK9327（PLAN 8・9）は、井戸SE9328の南にある2基の土坑である。東西に並んでいる。ともに一辺2mの方形の土坑である。瓦器や木器が出土した。瓦器の時期は13世紀後半だが、井戸SE9328よりやや古い。

溝 東西溝SD9875（PLAN 8）は、第131次調査西区の北端にある。溝幅1.1～1.5m、深さ0.6mで、断面は台形である。埋土は、上層が茶灰色砂質土、下層が青灰色粘質土である。13世紀の瓦器が出土した。

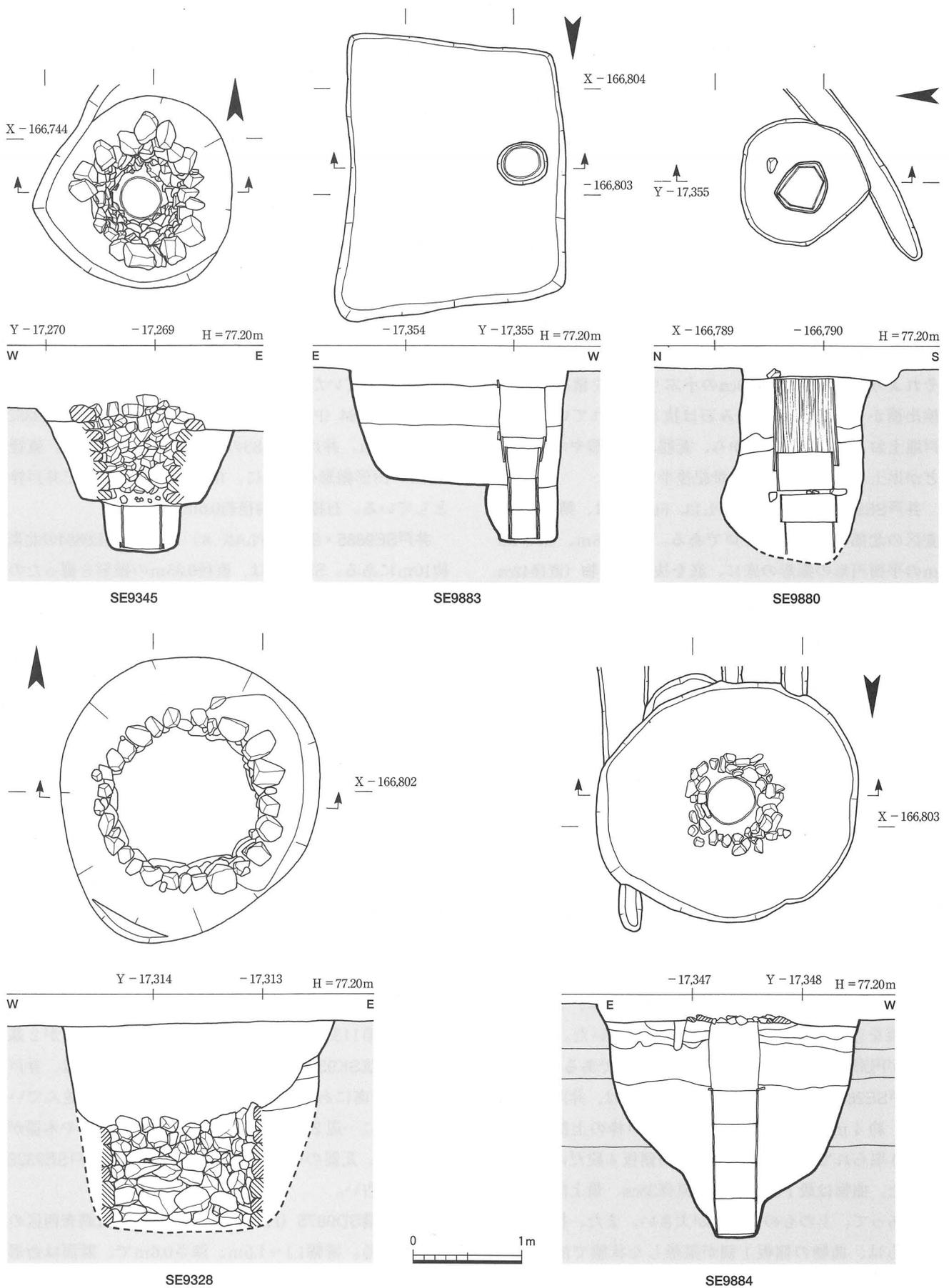


Fig. 9 中世の井戸 1 : 50